無三宝処への道

神戸和麿

一　五濁の世・無仏の時

仏道とは仏の教化による帰依三宝、仏弟子の道である。仏に帰依し、法に帰依し、僧に帰依したてまつると、人が真実（ダルマ）に帰依する依りどころを見出し、この濁悪の世に無上涅槃を歩むところにある。

曇鸞大師は、仏在世の時から遙かに遠い、「五濁の世、無仏の時」（『論註』）という地平、すでに仏陀ましまさぬ時に、この世に生きる衆生がどのように仏陀の教化、恵みに出遇い生きるのかを尋ねている。

その曇鸞のみつめた現実の凝視は、龍樹の「行体の難」に対して「行縁の難」といわれる。龍樹は仏道の十地の歩みにおける目的表象、不退転地、正定聚の機の自証を『十住毘婆沙論』「易行品」にあきらかなように、念仏往生の願によって必至滅度の願を見出した人といえる。

もし人、疾く、不退転地に至らんと欲せば、応に恭敬心をもって、執持して名号を称すべし。

と表白している。その不退転地とは、「易行品」のはじめに、

問うて曰く。阿惟越地菩薩の初事さきに説くがごとし。阿惟越地に至る者は、諸の難行を行ずること久しくして、乃ち得べし。あるいは声聞辟支仏地に堕す。もししからば是れ大衰患なり。

といわれる諸・久・堕の三難である。諸とは六波羅蜜の行を集め、三僧祇百大劫の久しい時間に渡って仏道の障害、煩悩障、所知障を超えて歩んでいく道である。その道は、

声聞乗を行ぜん者は、あるいは一世をもって度することを得、あるいは二世をもってし……。辟支仏乗を行ぜん者、あるいは七世をもって度することを得、あるいは八世をもってす。もし大乗を行ぜん者は、あるいは一恒河沙大劫、あるいは二・三・四・十・百・千・万・億に至って、あるいは是の数を過ぎて然る後、すなわち具足して菩薩の十地を修行して仏道を成ずることを得。（『十住毘婆沙論』）

というように、途方もなく遠大な道への精進である。「行体の難」とは、丈夫志幹の志願と行が要請される中に、怯弱下劣の身は個人の救いの二乗地に堕し、自利利他の菩薩の歩みを見失ってしまうところにある。

それに対して、曇鸞の「行縁の難」とは、龍樹の本願の歴史に立つ「信方便の易行」、他力の信を眼として、「五濁の世、無仏の時」という現実、時代社会を包む中に、念仏往生の願の不退転道、大乗正定聚の機が尋ねられる。

一つには、外道の相善は菩薩の法を乱る。二つには、声聞は自利にして大慈悲を障う。三つには、無顧の悪人、他の勝徳を破す。四つには、顛倒の善果よく梵行を壊す。五つには、ただこれ自力にして他力の持つことなし。（『浄土論註』）

ここでの五難は、仏道の歩みがなぜ外道化し、また声聞の自利に変質し、あるいは時代は人間悪が横行し、なぜ現実は害し合う世となるのか。さらに人びとはよりよい幸福な生活、善なるものを求めつつも顛倒していくのかを問う中に、「ただこれ自力にして他力の持つことなし」（唯是自力無他力持）と、仏道を支える源、また人が人として生きる道が尋ねられている。

『浄土論註』を読んでいくと、無量寿仏荘厳の二十九種、国土荘厳、仏荘厳、菩薩荘厳の中に、三界の世を生きる曇鸞の現実をみつめた眼がある。人びとは自らの幸福（自利）、他の幸福（他利）を願いつつも、なぜ害し合い、また殺し合い、また飢えのために子供が見捨てられていく現実、人の世の自利と他利の矛盾が悲しみの眼でみつめられている。一、二の例を挙げてみることにする。

たとえば、親鸞が大切にする「観仏本願力、遇無空過者、能令速満足、功徳大宝海」（如来の願力を観ずるに、遇うものは空しく過ぎず、大いなる功徳をめぐみ速やかに満足する）、その不虚作住持功徳成就のところでは、どのように人間のあり方、行為が虚作の業であるかを、『呉越春秋』、『魯子春秋』、『前漢書』の中の人間の出来事によってあらわしている。慶忌という人物が敵の臣、要離を信じて、自

分の食事や、お金を与えて養ったが、船の中で謀略のために殺されてしまったこと。あるいは、登通という男は漢の国の文帝に可愛がられ大金を貯える幸せの境涯にあったのであるが、文帝が変わるとその大金を没収され餓死してしまったという例話である。そこには人の生活がいかに虚作の業にあるかが知られよう。

また、「正覚阿弥陀、法王善住持」（浄土は、正覚・阿弥陀の法王（ダルマ）によって善く持たれている）、その主功徳成就のところでは、「ある国土を見るに、羅刹（鬼）を帝王とする国土ではみずからの作った欲望に支配されお互いが喰い合って生きている」と、そこには帰依するものを失った人間の自己中心性、欲望に支配されていく人間のあり方がみつめられている。

さらに、「愛楽仏法味、禅三昧為食」（仏法の味を求めて、禅三昧（さとり）を食物とする）、その受用功徳成就のところでは、「ある国土を見るに、鳥の巣をさぐって卵をとって豊かな食膳にそなえる者がいるかと思うと、壁に砂袋をかけ、それを食物とおもわせ、子供たちの飢えを凌ぐてだてとしている人がいる。なんと現実はいたましいか」と、子供の餓死していくいのちの痛ましさがみつめられている。

「永離身心悩、受楽常无間」（身心の悩みを永く離れて、楽しみを受けることをたえまない）、その無諸難功徳成就のところでは、「ある国土を見るに、朝に天子の恩寵にあづかって喜んだ者が、夕には過失により重罪の刑におのの く。あるいは幼い時に草むらに捨てられる境遇にあった者が、成長して立派な食事をとる富者となる。あるいは草笛えを吹いて勇んで門出した者が、突然、不幸に遭遇して喪服をつけて悲しみ帰ってくる。このように人びとは心にたがう悲しい出来事のなかに生きている」と。

そこには三界の中で、自利利他の平等を願いつつも、自利と他利が矛盾し合っている人間の現実、悲惨、そして、それぞれの人のあり方が無常の業風の中にあると、曇鸞がみつめている現実を知ることができる。

曇鸞は、苦しみ悲しみ多い迷いの三界に、無量寿仏の荘厳功徳、本願力を聞信し願生道を進んでいくのである。仏の衆生を大悲する荘厳功徳、仏によって知らされる衆生の病いのところに誓われ願われているといえる。

仏本（もと）、此の荘厳清浄功徳を起したもう所以は、（仏本所以起此荘厳清浄功徳）（『浄土論註』）

と、繰り返し、この世を生きるわが身とこの世を生きる人びとの場所に確かめられている。私たちの生活は欲界、色界、無色界の三界の中にある。欲望の生活、文化生活、精

神生活の中に私たちの日々はあるが、そのあり方は虚偽の相、輪転の相、無窮の相の中にあり依りどころのない生活といえる。それは虻蠟循環するといわれるように虻とり虫が植木の鉢のまわりをくるくる回っているように、日々があれこれに追われているうちに過ぎていくという生活である。また蚕繭自縛といわれるように蚕がみずからの糸で自分を縛るが如く、みずからの業によって自身を縛り苦しんでいく生活である。

仏がなぜ、無量寿仏の本願の荘厳を誓い起こされたのか。それは「哀なる哉、衆生は三界顚倒の不浄に締る」からだという。

二　阿弥陀如来を増上縁とする

一

「真実功徳相」は、二種の功徳あり。

一つには有漏の心より生じて法性に順ぜず。いわゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、もしは因、もしは果、みなこれ顚倒す。みなこれ虚偽なり。このゆえに不実の功徳と名づく。

二つには、菩薩の智慧・清浄の業より起こりて仏事を荘厳す。法性に依って清浄の相に入れり。この法顚倒せず、虚偽ならず、真実の功徳と名づく。（同前）

ここには曇鸞大師の仏教相応、仏道了解が端的に示されているといえる。仏道の歩みとは、仏陀の応化身によって説示された真実功徳相を体得するところにある。つまり、仏陀の応化の身を信頼しみずから修行するのである。

仏道を求める欲求、願いは「信」に始まる。世親の『仏性論』では、仏道を求める「欲」について、

欲とは、信に名く。信に四種あり。一つには有を信ず。二つには不可思議を信ず。三つには応に得べきことを信ず。四つには無量の功徳あることを信ず。この四義を具するが故に名けて欲となす。

と示している。仏道の出発点、その意欲は仏陀の応化の身を信頼して歩むところの「信有」、自身に仏性ありと信ずるところある。そして、仏性を磨き出していく歩みが応得因、応に得べきところの成仏という結果に向かって、その因を積むのである。その成仏の因を積むことは加行因といわれる。自性住仏性、引出仏性、至得果仏性と仏性を磨き出し、可能性を引出していくのである。そして、円満因、仏陀の智徳、断徳、恩徳の三徳を身証するのである。

いま、曇鸞も、応化の身によって説示された真実功徳相にみずからの努力によって相応する道を歩んだのである。

如来の法身徧満をわが身に心証しようと求めたのである。

しかし、みずからの努力において如実修行相応を願い求めれば求める程、有漏心、煩悩の身から一歩も出ることのできない三有虚妄の生が知られ、仏陀の応化身への信頼はいよいよ虚しく、疑情のさわりとなっていく苦悶があったといえる。

不如実修行といえること
鸞師釈してのたまわく
一者信心あつからず
若存若亡するゆえに
二者信心一ならず
決定なきゆえなれば
三者信心相続せず
余念間故とのべたまう
三信展転相成す
行者こころをとどむべし
信心あつからざるゆえに
決定の信なかりけり
決定の信なきゆえに
念相続せざるなり
念相続せざるゆえ
決定の信をえざるなり（『曇鸞讃』）

と、親鸞は頌している。

そこにはみずからの信頼の力によって仏の功徳、真実功徳相にわが身を相応しようとしながらも、まったく不相応の身でしかない自己への省察がある。どのように真実功徳相は覚知されるのか。そこに先の「真実功徳相は、二種の功徳あり」という自覚内容がある。

一つには有漏の心より生じて法性に順ぜず。いわゆる凡夫・人天の諸善、人天の果報、もしは因、もしは果みなこれ顛倒す。みなこれ虚偽なり。（『浄土論註』）

という、自身の不実功徳の内観である。

仏の応化身、仏の歴史への信頼は人間の場所から法性への信順が描かれることではない。真実功徳相の仏法は、仏法からの展開である。無漏の法性が人間の虚作の業を包み、衆生にただ一つの基礎、根源を証示してくだされたのである。それ故に、真実功徳相は菩薩（法蔵）の仏事の荘厳として、

二つには、菩薩の智慧・清浄の業より起こりて仏事を荘厳す。法性に依って清浄の相に入れり。（同前）

といわれる。「法性に依っ」た仏事、仏道の歴史の荘厳に他ならない。そのところには、人間の眼に映る形姿、仏陀

を超えた隠れた真理、真実功徳相の法性に依り生まれでたところの仏陀の応化身、形姿こそ仰がれているといえるだろう。また、すべての衆生もそこから来生している根源が明らかにされたといえる。

浄土の二十九種荘厳が願心荘厳におさまる広（二十九種荘厳）・略（一法句）相入を示すところでは、

法性法身に由って方便法身を生ず（由法性法身生方便法身）

方便法身に由って法性法身を出だす（由方便法身出法性法身）（同前）

といわれる。「法性法身に由って方便法身を生ず」という、「生」とは仏陀の応化身、形姿が法性法身よりいで、初めて雑業雑生の生命のあり方を包み、その源の一如、純粋生命を教示してくだされたといえる。続いて「方便法身に由って法性法身を出だす」という、「出」とは衆生の本来性、この世のひとつひとつの生命の源が法性、一如に基づくことを証示してくだされたことを意味しているといえる。

よく金子大栄師は〝一如の純粋感情〟という表現にて教えてくだされるが、人間の生きている世界は、一如の純粋感情を忘却してつねに自我感情の中に愛し憎しむあり方、また、優劣の差別の相を生きる。その自我感情に先立つ生命の流れ、すべてのいのちが一如であり、共通の場所にあるといういのちの家郷のことといえるだろう。そのいのちの家郷を教えてくだされた方が、仏陀、教主世尊である。であるから、『大無量寿経』には、仏陀の誕生は「神を母胎に降す」といわれる。人間、歴史の眼からみればマヤ夫人より生まれた人としてしか映らないが、法性の精神界を人間の歴史に方便し証してくだされた応化の人であるといわれている。そのように仏の教化の歴史、「法性法身に由って方便法身を生ず」という、教主世尊の値遇によりて、私どもも「方便法身に由って法性法身を出だす」という、無碍光如来に一心帰命し、無上涅槃道を自証する仏道を賜わるのである。親鸞はその二種法身に基づく尽十方無碍光如来に覚知していく道を、

この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり。この心に誓願を信楽するがゆえに、この信心すなわち仏性なり。仏性すなわち法性なり。法性すなわち法身（法性法身）なり。法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず。ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となのりたまいて、不可思議の大誓願をおこ

して、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。この如来を報身ともうす。誓願の業因にむくいたまえるゆえに、報身如来ともうすなり。報ともうすは、たねにむくいるなり。この報身より、応化等の無量無数の身をあらわして微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまう、

と、『唯信鈔文意』に述べている。

二

そこには、「世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。この如来を報身ともうす」と示され、続いて「報身より、応化等の無量無数の身をあらわして、微塵世界に無碍の智慧光をはなちたもう」というところに阿弥陀仏の本願の歴史は展開する。

その阿弥陀の本願の歴史は、釈迦如来を応化の菩薩として、釈尊の如く修行しようとする仏道のあり方の転換を意味する。

『浄土論』、『論註』には、仏の証りを目的表象とした仏道の実践は、五念門の行によって表わされる。五念門の行とは、善男子善女人の修道者の行である。そして、その中心は作願、観察の止観行、如実観である。礼拝、讃嘆はその止観の前方便であり、回向はその止観のはたらく内容である。

礼拝門は「彼の国に生ぜん意を為さんが故に」、讃嘆門は「如実に修行し相応せんと欲するが故に」、作願門は「如実に奢摩他を修行せんと欲するが故に」、観察門は「如実に毗婆舎那を修行せんと欲するが故に」、回向門は「大悲心を成就することを得るが故に」といわれているように、「如実修行」の止観を基として、自利利他の菩薩行を成就していく無上仏道の歩みである。

そして、『論註』では、その如実修行の作願に三義、観察に二義を釈し、ことに回向に二相を釈義してくるところに、仏道の眼目が明らかにされてきたといえる。そこには如実修行のあり方を順序とした作願、観察を通して、如来の作願、観察と転回し、仏の本願力の住持によって無上仏道が成り立つ道が確かめられている。

如実修行とは真実清浄なる行の歩みのことである。そのことは私たちの生活においての社会的な実践においても、倫理的な実践においても、如実の実践とは何であるかということで、私たちのいろいろの行のことではなく、純粋なる行はいかなる行かということである。たとえば、清浄懺悔ということでいえば、その清浄懺悔を成りたたしめるも

のは何か、はたして人間の可能性に内在しているのか。そういうところに『論註』では、人間の行為の根となっているところの自力の菩薩行の「作心」、また「八番問答」では衆生存在があらゆる行為の根において「謗法」の罪にあることを見つめている。

仏道の課題とはわれわれ衆生における「如実修行」の道である故に、そのような障害が問題となる。そして、その修行ははじめは釈迦如来を応化の菩薩として、釈迦の如く修行しようというところにある。その仏の証りを目指していく菩薩の進趣階級は十地の一地、一地を超え、迷いの世界を翻えして等正覚に到る道への試みである。釈迦が仏になった妙覚を理想、目的表象として初地から登りゆく道である。その歩みの中で七地から八地に進む過程に最大の関門がある。その関門をくぐり抜け、平等法身を得証した位、境地は次のようにいわれている。

「平等法身」とは、八地已上の法性生身の菩薩なり。（「寂滅平等」とはすなわちこの法身の菩薩の所証の）寂滅平等の法なり。この寂滅平等の法を得るをもってのゆえに、名づけて「平等法身」とす。平等法身の菩薩の所得なるものをもってのゆえに、名づけて「寂滅平等の法」とするなり。この菩薩は報生三昧を得。三昧神力をもって、よく一処、一念、一時に十方世界に遍じて、種々に一切諸仏および諸仏大会衆海に供養す。よく無量世界に仏法僧ましまさぬところにして、種々に示現し、種々に一切衆生を教化し度脱して、常に仏事を作す。初めに往来の想・供養の想・度脱の想なし。このゆえにこの身を名づけて「平等法身」とす。この法を名づけて「寂滅平等の法」とす。（同前）

しかし、その境地を目指したところの自力の如実修行、仏への作願、観察、回向の菩薩行のところには超え難い壁、関門がある。そこには「作心」を超えることのできない末証浄心の菩薩の自覚がある。菩提心を起こし、その起こしたところの菩提心がぶつかるところの壁といえる。

「末証浄心の菩薩」とは、初地已上七地以還のもろもろの菩薩なり。この菩薩、またよく身を現ずること、もしは百、もしは千、もしは万、もしは億、もしは百千万億、無仏の国土にして仏事を施作す。かならず心を作して三昧に入りて、いましよく作心せざるにあらず。作心をもってのゆえに、名づけて「未証浄心」とす。（同前）

といわれている。有仏の国土に仏、諸仏を求め、無仏の国土に限りなき衆生を度する菩薩の身を示現して、歩み続け

ようとするところの志願である。人間から人間を超えようと努力し、作心する中に「作心」を超える道を願うのであるが、その試みは到底無理な、求める立場そのものに矛盾を孕んでいるといえる。人間自体から人間を厭い、超える道ははたして可能であるのか。しかし、自力の作心の道に、「証り」を目標とし、「行」においては作心を超えることを要請する。しかし、その「証り」と「行」の関係は、「証り」においては証に埋没するか、あるいは「行」においては、証りのための手段となってしまい、目的と方法がそろはないことになってしまう。それ故に、

菩薩七地の中にして、大寂滅を得れば、上に諸仏の求むべきを見ず。下に衆生の度すべきを見ず。仏道を捨てて実際を証せんとす。（同前）

と示される。そこでの仏道の歩みは、いつの間にか、すでに求むべきものは求め得、度すべきものは度し得たという主観の観念主義、個人のさとりに停滞するか、あるいは主観の体験主義、個人のすくいに閉塞してしまう。そして、仏道の課題である「自利利他」の道から遠のいてしまうのである。

そのような中に、人間からの菩薩行、そこでの「末証浄心の菩薩」とは人間から仏に橋を掛けることのできない不如実修行の自覚である。つまり、人間から人間を厭い、超えることのできないという限界点の自覚といえる。そして、その限界点の確かめを通して、

この菩薩（末証浄心の菩薩）、安楽浄土に生まれて、すなわち阿弥陀仏を見んと願ず。阿弥陀仏を見るとき、上地のもろもろの菩薩の畢竟じて身等しく法等し、と。龍樹菩薩・婆藪槃頭菩薩の輩、彼に生まれんと願ずるは、当にこのためなるべしならくのみ。（同前）

と、なぜ、龍樹、天親が願生道を願ったかの所以が押えられてくる。そこには菩薩行の転回点が示唆されている。

ここで注目される事柄は、「見阿弥陀仏」ということであるが、仲々了解し難い。何かそのことを解くヒントはないかと、後を読んでいっても、還相回向の願文が引かれ、

この『経』を案じて、かの国の菩薩を推するに、あるいは一地より一地に至らざるべし。「十地の階次」というは、これ釈迦如来、閻浮提にして、一つの応化道なくのみ、と。他方の浄土は、何ぞ必ずしもかくのごとくならん。五種の不思議の中に、仏法最も不可思議なり。もし「菩薩必ず一地より一地に至りて、超越の理なし」と言わば、未だ敢えて詳らかならざるなり。（同前）

といわれているだけで、あまりよく了解できない。

しかし、ここでの「超越の理」ということは、漸次に一地から一地へと進んでいく菩薩の道、「これ釈迦如来、閻浮提にして、一つの応化道ならくのみ」という、釈迦を仏道の基準、理想とした歩みを超える道が示されているといえる。この文の「超越の理」とは、釈迦を理想として、釈迦の応化身のごとく道を進もうと、出発点から到達点へ到る道ではなく、すでに到達点が私たちの出発点となっているところの道を暗示しているといえる。いい換えれば、因から果へ漸次に進んでいく道が転じて、果から因への道がすでに見出されているということである。そこは、釈尊を初めとして、釈尊以外の十方三世の衆生の仏になる道が、すでに仏によって「見阿弥陀仏」と見出されていたという立脚点である。その道は、自力心からは見えない隠れた真理、釈尊をうみだしたところの根源の推求といえる。

そこは釈迦如来を基準、理想とする一応化道を超え、阿弥陀仏の本願の歴史に立つ応化道の展開があると了解できよう。その仏道の本こそ、

問うて曰わく、何の因縁ありてか「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と言えるや。答えて曰く、『論』に「五門の行を修して、もって自利利他成就したまえるがゆえに」と言えり。しかるに、覈（まこと）にその本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁とするなり。（同前）

と尋ねられている。「阿弥陀如来を増上縁」となす「信仏因縁」の道、凡愚の身が大乗正定聚の機を得るところの願生の道である。そこに阿弥陀仏の本願の歴史に立つ、「五濁の世・無仏の時」を生きる無数の衆生に応化道が、往・還の道として開かれてくることになる。

三　遍至三宝の功徳

いま、阿弥陀仏の本願の歴史、その目覚めということを仏八種功徳に尋ねれば、不虚作住持功徳のことである。仏の八種功徳は仏の正覚の座からはじまる。

「無量大宝王、微妙の浄花台にいます」（無量の妙なる宝珠で飾られた華の台（うてな）の王は、仏の座である）。曇鸞はその仏の正覚をひらかれた座について、「草を敷き、しかして、坐して阿耨多羅三藐三菩提を成」ずるといわれている。そこには『大経』の文が想い起こされる。樹の枝につかまりかろうじて尼蓮禅河からはい上がり、施草を受けて仏樹にて正覚を得られた。その時の様子は「出山の釈迦」にても知られるように生死のギリギリの境目である。その時の疲れきった釈尊のお姿を見ても誰れも釈尊を信頼し、恭敬

し、愛楽しないだろう。そのような中に仏座が問われている。

いま、その座を天親菩薩は「無量大宝王、微妙の浄花台にいます」と讃えるのである。そこには仏陀の全身全霊のご苦労のなかに、すべての衆生のただ一つの根源、唯一の基礎が見出されたのだと。そこに在します仏陀は〝蓮華の王の座〟に座られているのだと、『観経』の第七華座観によって讃嘆している。そして、すべての衆生を救うことを誓う利他の、第八種不虚作住持功徳では、仏道を求めつつも二乗地に堕してしまう者、あるいは悪縁によって仏に背いた提婆達多、居伽離という人びとを通して、仏の正覚の座がこの世の人びとに隅なく残すところなくすべての衆生に虚作せず住持する如来の願心が誓われてくるのである。

「不虚作住持功徳」は、蓋しこれ阿弥陀如来の本願力なり。乃至言うところの不虚作住持は、本法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依ってなり。願をもって力を成ず、力もって願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力、願あい府うて畢竟じて差わず、かるがゆえに成就と曰う。（同前）

そこには仏の正覚の座が、世を超えた阿弥陀如来の自在神力に基づき、すべての衆生を荷負群生し、目覚ましめんとはたらく法蔵因位の願心こそ明らかにされてくる。如来利他の不虚作住持功徳の法蔵の願行は、菩薩の正修行、四種功徳によってあらわされる。㈠不動応化の功徳、㈡一念普照の功徳、㈢無余供養の功徳、㈣遍至三宝の功徳である。

そこでの阿弥陀仏の本願の歴史に立つ応化道は、長く仏教が理想としてきた「釈迦如来、閻浮提においての一応化道ならくのみ」という、釈迦仏を理想、規準としてきたあり方とは異なる。先の菩薩の四種功徳の内容で注目されることは、「十方に遍じて種々に応化して、凡夫の煩悩の泥中に在って仏の正覚の花を生ず」とか、また「一心一念に大光明を放って遍く十方世界に至り、一切衆生の苦を滅除する」。あるいは「一切世界において余すところなく諸仏会を照らして大衆を供養し、恭敬し、讃嘆」するといわれている。そして最後の、遍至三宝の功徳のところでは「十方一切世界の無三宝処において仏・法・僧宝の功徳の大海を住持し荘厳」すると示されてくる。

そこには阿弥陀の自在神力の住持により、この世を超えた阿弥陀の仏国、〈有仏〉の国土への往生（住相）であると同時に、法蔵の因位の願心はどこまでもこの穢土の、〈無仏〉の国に還来穢国し「無量無数の身」（『唯信鈔文意』）を示す、人間に応化（還相）した法身のはたらきを意味して

いるといえる。つまり、本願の覚知、無碍光仏を輝かす機の往生は回向の二相にある。この世を超えこの世を包むところにある。釈迦はこの世を超える無碍光如来（法身）を輝やかす機として人間のために人間の形をとってくだされた応化身である。その応化身は一人格に終るのではない、すべての衆生の基礎、唯一の根源を選んでくだされたのである。つまり、人間に応化した法身、人間にまで具体化した法身として、すべての衆生の「誓願の業因にむくい」（同前）てくだされた報身如来は、法蔵菩薩の尽未来際にわたって働く人格である。私たち衆生の罪性のところに働き給う大悲、法蔵菩薩の修行のことである。

曇鸞大師は、釈迦如来の一応化道を超える阿弥陀如来の本願力の目覚めのところで、「超越の理」を知らないということについて、松の生長と好堅という樹の成育のたとえをだしている。松は一日にどれだけ延びたか、一寸延びたかも分かりかねるが、好堅という樹は一日に百丈も育成すると。

それは世間、世界を超える樹のたとえである。世界を超える樹は高い。しかしその樹を支える根も限りなく深いだろう。法蔵とはこの世を超えた正覚の華に対しての泥の中の根である。泥の中にあって泥を超えて華を咲かせている根である。その大悲の根は、この穢土の「無仏」、「無三宝処」のところにある根といえる。

「正覚阿弥陀法王善住持」（浄土は、正覚・阿弥陀法王（ダルマ）によって善く持たれている）。その主功徳の住持について、『論註』では次のようにいう。

浄土の命を捨てて、願いに随って生を得て三界雑生の火の中に生ずと雖えども、無上菩提の種子、畢竟じて朽ちず。

（本学教授　真宗学）

（平成四年十月二十九日受付）